幼児の創造的活動の指導（上）

――音楽リズムを中心として――

岡田鈴代

はじめに

幼児たちは、いろいろな経験の中からたえず新しいものを生み出し、また発見する能力をもっています。このような力を十分に発揮することができるような保育ができたら、どんなに素晴らしいだろうと思うのです。

でも私どもは、実際の保育をしているときは、ともすると急ぎがちになって、何かその場で、はっきりとわかる効果が認められないと、どうも不安で、なにか幼児たちにすまないような気持になってしまうことが多いようです。そして、せっかくの可能性の芽をつんでしまうことも、おうおうにしてあるのではないかと思います。

そして、また何か幼児の全身の中から発してくる尊いものを、みのがしてはいないだろうかという不安にもかられます。

このようなことについて、私は、おもに音楽的な活動につながるものの中から、実践を通して考えてみることにしたいと思います。といいますのは、音楽となると、とかく技術的な面が脳にきざまれて、教師が前面に出てしまう結果ともなり、一つの形式の中に幼児を近づけたりする傾向がみられたりもいたします。

そこで私は、どちらかといえば、幼児の自由なあそびの中から、音楽リズム的な活動を何とかみつけだし、発展させてやれないものかということについて、考えたりいたしました。

もちろん、音楽リズム的な活動の中には、教師が前面に出てしなければならないものもたくさんありましょう。それはそれとして、私は、自由なあそびの中で、幼児の経験するいろいろなリズムに対する反応や、音に対する反応の中に、幼児の生活や成長にとって、とても大切な経験があるのではないかと思うのです。それでこれから紹介いたします実践は、幼児の生活の中にある音楽

リズムというような活動の記録ということになると思います。

私は、これらのことについて、幼児の発達にしたがって、四つの面から実践の記録をたどりながら紹介したいと思います。なお、本市の公立幼稚園は、一年保育のみですから、その点もお含みおき下さい。

即ち

1　共通の経験からうまれた表現について
2　遊びの場からうまれた創作的表現について
3　集団的な自由表現の発展について
4　総合的な表現の展開について

(一)　共通の経験から生まれた表現について

〈例一〉

六月二日、六、七名の幼児たちは、園庭の桜の木の毛虫の群集をみつけた、早速毛虫をとってきて、机の上をはわせたり、何匹も箱の中にいれたり、砂場で砂を深く掘って坂道といって斜めにはわすなどして遊んでいました。帰りになると、「ここ毛虫の家」と砂場の穴の中にいれ、その上にそっと板をのせて、さらにその上に砂をかぶせて帰りました。

次の日には、登園と同時に毛虫の冒険ごっこといって、割ばしと紙ひもでブランコをさせたり橋を作って競争をさせたりしていました。他の幼児たちがどんな遊びをしていようと、全然無関心なようすで、あきることなく毛虫がいる間楽しんでいました。私は、このKグループの無心に遊ぶ姿をほほえましく眺めていました。けれども、このグループの幼児たちが部屋に入ってくると、女子グループからは、「あの子たち、きたないに」といって、きたない者扱いにされてしまいました。

そこで私は、このままではと思って、このチャンスをつかまえて、一人ひとりの幼児たちにも、毛虫の観察をさせたく思いました。そこで、毛虫で遊んでいる幼児たちに、「毛虫の冒険ごっこを部屋の中でしてもいいわよ、きっとおもしろいよね、お友だちがこわがらないように上手にしてみせて」といいますと、得意顔でいさんで毛虫を持ってきました。逃げるようにして、きたないといっていたグループの幼児たちも、「うちらもみよか」「うんみよか」といいながらよってきました。はじめのうちはしかめ顔をして見ていましたが、しばらくみていますと、だんだん気持の悪いようなようすもなく、じっとみつめていました。

そのうちに、「動き方が可愛らしい」「背中をまるくしてから前足出すに」「口が小さいし、上を向いて動かす」「足がたくさんある」「箸の端までくると、落ちそうになる」「あるくところがないで」「あ、またもどってきた」とみんなが口々に話し合っていました。

私はそこで、この場のようすから、自然の教育内容にウェイトをおいて、表現的なものと組み合わせてみたくなったのですが、

そうすることによって、一つのまとまりのある幼児の活動になる可能性もありますが、それでは本当の表現が出てこないということにもなりかねませんので、自然にリズム的な動きが幼児たちの間から生まれてこないかしらと思って、じっとようすを、うかがっていました。

するとY児が「毛虫やぞー」といいながら友だちの背中の上を毛虫がはうように手先を動かして、いやがらせをはじめました。そこで、私はここがチャンスだと思って、幼児たちに共感を呼ぶように、「Y君が毛虫さんになったわ」というとY児はさらにいろいろな毛虫のまねをはじめました。

○床の上をはう。

○頭をもち上げて、左右に首を振る。

○二人、三人とだんだん友だちの後に連なってあるく。

など、簡単な身体表現でしたが、そのようすがとても毛虫に似ていました。他の幼児たちも徐々に参加して、お友だちの表現と毛虫とをみくらべて、「Yちゃんたちの首を振るところがおもしろいに」と友だちの動きをみて楽しんでいました。

このように、自由遊びなどの折に十分観察させることから出発して、その物の動きをまねる模倣的な表現から、徐々にみて感じたこと、考えたことの表現へと発展させてやることは大切だと思います。

この実践例は、教師と幼児との感情的なかかわりあいが動機になっていますが、幼児は、どのような行動にせよ、教師が自分の行動や感情を受け容れられたと感じたとき、よりよき表現をするのではないだろうかということの一例を示したものと思います。ですから音楽リズムの指導においても、このような行動面からの発展性は、他の活動と同様もっとも基本的な問題ではないかと思います。

〈例二〉

六月九日、この日は、朝から雨でホールでの遊びが盛んでした。男子数名が「でんでん虫になってはってんの」といってマットや平均台の上をはいまわっていました。

そのうちに、平均台の上を、

○ひざ立てであるいている。

○腹ばいになったまま屈折しながらはう。

○手足を引込め巻貝に入った感じをする。

○平均台の横の面に顔をやったりして、頭を動かしながらはう。

など、いろいろな表現をしているのです。

私は、このような幼児の活動をみていますと、なんだか、この自発的な活動を契機にして、幼児の気持や考えをもっと自由に表現させてやりたいような気持にかられ、もっといろいろな表現ができるように、平均台とマットの間にはしごをかけてやりました。このような配慮で表現はさらに発展しましたが、リズムを入

れたら、どのようになるだろうか、もっと発展しないだろうかと思って、文務省唱歌の〝でんでん虫〟の曲をピアノで弾いてやりました。すると予想していたように、楽しさが増し、身体の動きがいくらかリズムにのってきました。しかし遊具を媒介としているだけに、動きにアクセントがみられませんでした。

そこで和音の利用を思い立ち、ドミソの和音がなったら、頭や手足を引込めて巻貝に入った動作を、ドファラがなったら、頭や、つのを出して動き出す、ミソドがなったら、お友だちの〝でんでん虫〟と話をするなど約束して、和音遊びを取り入れてみました。すると〝でんでん虫〟の表現とおりまぜて約五〇分位の長時間遊ぶことができました。他の組の幼児たちもこの遊びに入ってきましたのでホールはいっぱいになりました。

そこでどこにこんなにも幼児たちの気持を満足させるものがあったのかしらと、いろいろ考えてみました。このような遊びは、どちらかといえば、原始的な身体的リズムを中心とした遊びかもしれませんが、でも、幼児たちにとっては、とても熱中して遊べるらしいのです。

このような、幼児たちの感情を大切にしながら、身体の中から出てきたリズム反応を大切にしてやることは、音楽的な成長の基礎を養うものではないかと思うのです。

(三) 遊びの場から生まれた、創作的表現について

〈例一〉

六月二十日、T児は、登園と同時に日曜日の経験（海での貝とり）を早く教師に話したいらしく、収獲のえものを手にして、（蛤、やどかり）塩水も別のビニール袋にいれて、「先生、これ海へ行ってとってきたの、この水なけやな、あかんに、もっととったけどな」と得意そうに話しかけてきました。

「そう、どうもありがとう。もってくるの大変だったでしょ」

「ぼくが水槽に入れてあげる」T児はこの小動物に愛情がわいているのか、大事そうに両手で、やどかりをかばうようにしていれました。熱心にみとれている友だちもいかにもおもしろそうです。やどかりが小さい巻貝から足をスウーと出し、リズム的に、タ、ン、とあるく格好にしばらくみとれていました。時々指でさわると急いで引込めますが、また出して、タ、ン、とあるきます。私は思わず声をあげて、「わあ！　かわいいわね」といってしまいました。

他の友だちに収獲した時のようすなどを想像させたくて、「T君、どんなふうにして、とったの」と聞きますと、「ぼくが貝掘っとんたんな、そしたら横の方の砂の中から、もぐもぐと出てきたん」「ほんと、びっくりした」とF子、「ううん、ぼくがとったんやに、小さいカニさんもおったに」T児の話をうなずくように聞きながら、あきることなく眺めている幼児ら、一つのものに熱中している姿をみることができました。そして、幼児たちの顔をみ

やどかりさん

♩=100

やどかりさんはかわいいな

ちいさいからだでおさんぽだ

たとき、笑みをうかべ、T児がやどかりをかばう気持と同じように、他の幼児からも愛情の高まりを感じとることができました。このような雰囲気の場から、何かが生まれてきそうなものを感じとりましたので、私は、「やどかりさんの歌を作ってあげて」と話しかけると、「フフフ」と笑いながら「ラララ」と首を振りながらH子はハミングをしました。H子は、すこしずつ言葉にしているようでした。

他の幼児たちも、それぞれ口の中で何かを断片的に口ずさみ出しましたので、ハミングしているメロディを二度ぐらい弾いてやりますと喜んで合唱しました。そして、「これ、うちらが作ったうたやに」といって自分たちの歌として、クラス全員喜んで口ずさむ姿をみることができました。

私は、すこしヒントをあたえてメロディをまとめたいと思いましたが、この歌をいつまでも喜んで歌っている幼児の姿をみてそのままにしておきました。

幼児がうれしい時や遊びに夢中になって興にのった時などに、創作的な表現の芽ばえがみられるのも、こんな時だと思い、些細なこれらの経験を大切にしてみとめてやり、次への意欲を伸ばしてやりたいと思いました。

以上のように、何となくやるせない、そしてまた、これでよいのだという安心感のおりまざった気持の一学期もすみました。

—つづく—（四日市市立中幼稚園）